黒の至宝　－Black Regalia－

六条藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒の至宝　－Ｂｌａｃｋ　Ｒｅｇａｌｉａ－

【Ｎコード】
Ｎ２４７６Ｇ

【作者名】
六条藍

【あらすじ】
祇音は『拝み屋』と呼ばれる職を営む１６の娘。ある日、古くからの知人で恩人たる胡蝶からある依頼を受けることになるが、それにはもれなくいけ好かない男が用心棒としてつくことになって…！
和風恋愛ファンタジー。黒の至宝は巡り、巡らせる。

第一話：始まりには蝶が舞う

夏の暑さはすっかりなりを潜め、日増しに秋色が濃くなっていく。
道の両脇に所々植わっている銀杏（いちょう）の木には、その実が重く垂れ下がっている。
涼風が吹く中を、朝から延々と平坦なその道を歩くこと数時間。
祇音（しおん）の目の前には何処にでもありそうな至って平凡な農村の風景が広がっていた。
作物が一斉にその恵みをもたらさんとするこの時期、重く頭を下げた黄金色の稲が一面に広がり、
それを刈り取る人々の歌う歌が田の横切るようにあぜ道を歩く祇音の耳に届いた。
「アンタ、見ない顔だねぇ。」
一人の中年女が手を休め、横を通り過ぎた祇音に声をかけてくる。
小さな村はたった一人よそ者が入っただけでひどく目立つ。
祇音は足を止めて、被っていた笠を少し上げて、微笑んでみせた。

「ちょっと、この先にあるっていうお寺に用があるの」
「あの寺に、かい？」
訝しげな顔をした後に、女は「やめときな」と顔をしかめてひらひらと手を振った。
祇音が首を傾げて理由を問うと、女は態とらしく声をひそめて深刻そうな顔で祇音に耳打ちした。
「あそこはね、化け物がでるんだよ」
（化け物、ねぇ――）
女の言いようがこの陽気にやけに不似合いで、祇音は思わずクスッと笑った。
祇音が冗談にとったと思ったのだろう、女は真剣な顔で「本当だよ」と続けた。

「あそこには人食い鬼が住んでるのさ」
「あれま、誰か食われたの？」
「んにゃ、誰も食われちゃいないよぉ。
誰も近づかないし、食われないように日が暮れた後は、この村じゃあ、誰も外を出歩きゃしないよ」
「ああ、それはよかった。」
とんでもない、と言わんばかりに首を振る女に、祇音は安心したように息を吐くと、そのままアッサリと「じゃあ、頑張って」とニコッと笑って、女に別れを告げた。
あぜ道を迷い無い足取りで進み始める祇音を後ろの方でなおも引き留める女の声がしたが、軽く手を振るだけに留める。

恐らくこれから行く寺に化け物、鬼が居ないだろうし、仮に居たとしてもそれは祇音の足を止める理由にはならない。
というより、化け物がいると聞いて、いちいち逃げ帰ったらそれこそ商売あがったりだ。
何せ祇音の仕事はそういう化け物の類なしには始まらない。

『拝み屋　祇音』

そんな名称を名乗りながら、諸国を旅し始めて、およそ三年の月日が経った。
女の一人旅は何かと心細いことがあったけれど、養父に仕込まれた処世術のおかげなのか、何度か「ひやり」とした経験はしたけれど、命の危機にさらされたことはない。

目の前に連なる一本道をひたすら歩いていると、いつの間にか周囲は木々の鬱蒼とした場所へとかわっていく。
重なり合った枝としげる葉によって日の光が遮られて、辺りは少し薄暗くなる。

足下はそれでも雑草が丈高く生え、その強い生命力を存分に発していた。祇音は文字通り草の根を　かき分けるようにして、前に進んだ。

その道の果てに崩れかけた石段が姿を現す。

罅のはいった石の間からは、雑草が生えていて、表面は緑や茶の苔に覆われている。雨の日にこの　階段を上ろうとすると、すべって難儀なのに違いない。

（あそこか―…）

２０段ほどの階段を上がりきったところに、ひどく貧相な寺がポツリと寂しそうに建っているのが目に入る。

祇音はふぅと息をつき、袂にしまい込んだ手紙をそっと服の上から抑えた。

祇音がその文を受け取ったのは、昨日の話だ。

暗い山の中で野宿をすることだけは避けたかった祇音は、ひたすら山道を歩き続け、なんとか日が暮れる前には、山の向こうの村へ到着した。

すっかり疲れ切った身体をできれば暖かい布団の中で休めたいと思い、どこか泊めてくれそうな家を探して祇音は暫くの間、村を彷徨っていた。

そうしていると、百姓のような身なりをした年若い男が現れて、祇音を呼びとめ、なぜかそのまま祇音を村の乙名の家に招待したのだ。

乙名はその村の指導者を意味し、長老・宿老などとも呼ばれる。

元来、名主層や多くの土地を有する有力者達がなるものだ。

連れて行かれた家は、中々立派で小綺麗な一軒家で、祇音を連れてきた男はその家の息子だという。

乙名たるこの家の主は、好々爺とした老人で、祇音に対して寝る場所だけでなく、夕餉をも振る舞い、歓迎してくれた。
最もそれは、ただ純然たる好意だけでなされたものでないことを知ったのは、食後の茶を振る舞われた直ぐ後――『拝み屋の祇音』の名を知っていた乙名が祇音に仕事の依頼をしてきたときだった。

（そういう狙いがあったわけね）

彼等の親切に多少感動していた祇音からすれば、ちょっと興ざめではあったが、一宿一飯の恩義をうけたことには変わりなく、祇音は仕方なしにその依頼を引き受けた。
そしてその晩、与えられた部屋で柔らかい布団を敷き、熟睡していた祇音の元に、突然1羽の鴉がどこからか飛び込んできた。
何事かと思って飛び起きれば、それはすぐに一枚の紙に代わりひらひらと祇音の手の中に収まった。
『明日、隣村の廃寺にて待つ』
簡潔すぎて素っ気なさすら感じる文章が、走り書きのようにその紙には書かれていた。
その左端にそっと書かれた「胡蝶」という名前は祇音がよく慣れ親しんでいる者の名であり、ソレと同時に祇音は先ほどの鴉が「式神」であることを知ったのだ。
式神を使ってまで自分に連絡をつけようとしたのだから、それなりに重要な用件に違いない。
乙名には夜には必ず戻ってくることを告げて、荷物を乙名の家に預けて、朝日が昇るなり家を出てここまで歩いてきたというわけなのだが――…

（またまあ随分と荒れてること）
門前雀羅といったところか、人の手がはいらなくなった家の退廃具合というものは見る者に一種の憐憫の情を抱かせる。

祇音は本堂の―とはいえ主だった建物はそこしか見あたらなかったのだが―入り口にはった蜘蛛の巣を祓いながら、ゆっくりと中に端を踏み入れた。
戸から差し込む日の光が薄暗い室内を照らしている。笠をとって、室内の様子に素早く目を走らせる。
中は外観と劣るとも勝らぬ荒涼とした様子で、床の一部はすでに腐りかけ、一歩踏み出す事にギシギシと音を立てる。
奥に行くほど薄暗さは深まり、その最奥に鎮座する本像は右手がとれ、顔に大きなヒビが入っている。
本来は慈愛に満ちた笑みを浮かべているはずのその表情はそれ故にひどく歪み、どことなく祇音に　不気味な恐怖心を抱かせた。
なるほど確かに、村人が化け物が出るなどという噂が出るのもうなずける。
こういった廃屋の多くにそう言った怪談はつきもので、それら全てが本当かどうかは怪しむべきところではあるが、
良くないものがたまりやすいというのもまた事実ではある。

「やあ、久しぶりだね」
光の届かぬ右隅奥より、ぬっと一人の女が祇音の前に現れた。
紅の切り袴に、白い小袖の上には無地の白い絹で出来た千早。
紅の胸紐に首からは、鉦（かね）―　金属で出来た太鼓のようなモノ―がかけられている。
腰から金銅の瓔珞（ようらく）と呼ばれる飾りが垂れ、千早の裾から覗くそれは細い光を受けて僅かに輝いた。
一見すれば巫女のようにも見えるが、顎の辺りで切り揃えられた鳶色の短い髪や自信に満ちあふれ、強烈な光を秘めた琥珀色の瞳が巫女の元来もつべき神秘性とかけ離れた昂然たる印象を相手に与える。
彼女の姿はすっかり辺りにとけ込み、けれど決して闇に飲まれず確固たる存在感をもってそこにあった。

この女性こそが手紙の送り主、胡蝶である。
胡蝶がゆっくりその白い手を伸ばして、祇音の頭を撫でた。
くすぐったそうに首をすくめる。

「少し見ない間に大きくなったね」
「少しって……何年ぶりだと思ってる？最後にあったのなんて、三年前よ、三年前。まだ私が十三の時だよ？大きくなるに決まってるじゃない」
「――そうだったっけ？ふふ、三年かぁ、なるほどね、道理で年を取るわけだ。」
愉快そうにそう言って笑う胡蝶。
祇音はその彼女の外見に、三年前となんら一つ変わった点は見いだせなかった。
年齢不詳の彼女にその由縁を尋ねる気にもならず、祇音は辺りをグルリともう一度見渡して、「それで？」と首を傾げた。
「一体どうしたっていうの？こんなところにいきなり呼び出して」
「ちょっと用事があってね」
「それはあるでしょう。何の用事もなくあんな風に呼び出されたら困る」
ごもっとも、と胡蝶は軽く肩をすくめる。
祇音は薄く埃のつもった室内にこれ以上踏み込んで裾を汚してしまう気にもなれず、入り口に立ったままそこを動こうとはしなかった。
胡蝶はその祇音に向かい合うようにして立って、言った。

「頼み事があるんだ」
「頼み事？私に？」
胡蝶の――命の恩人たる彼女の力になる、ということは祇音にとって一種の目標のようなものであった。
だが、今でこそ『探し屋』などというよくわからない職を営んで

いるが、元々はその筋では知らぬ者はいないと言わるほどで、祇音など足下にも及ばぬような凄腕の術者である胡蝶。
その彼女に実際、祇音ができることは皆無と言ってよかった。
彼女の力になれるかも知れない可能性があるということは、喜ばしいことではあったが、同時に何を頼まれるのかと考えると不安にもなる。
彼女の期待に応えられるだろうか？
祇音は緊張した面持ちで尋ねた。
「私で出来ることならばやる。でも……こんな廃寺に呼び出さないと頼めないようなことなの？」
「まあ、ね」
胡蝶はおもむろに懐から手のひらほどの大きさの木箱を取り出し、祇音に差し出した。
持ってみると見かけによらず、ずっしりと重い。
一体何が入っているのかと、胡蝶を見れば彼女は祇音に箱を開けるよう視線で促す。
訝しげに思いつつも、祇音は上の木板を奥に滑らせるようにして、ゆっくりと木箱を開けた。

「うわっ」

祇音は思わず声を上げた。
中に鎮座しているのは艶やかな光彩を放つ大粒の黒い真珠、と思われるものだっただ。
真っ黒というよりは僅かに赤みがかっているようにも見える。
ただ、赤いというだけではなく微妙な光の当たり方で色の深みが変化していて、まるで孔雀の羽のように鮮やかで美しい。
そして、今まで一度だってみたことが無い、そしてこれからも見ることはないだろうときっぱりと断言できるような見事な球形。
滑らかな傷一つ無いその表面をそっと出て触れようとして、祇音

は手をとめた。
この清らかな美しさにたった一つの汚れもつけてはいけないような気がしたからだ。
祇音は、真珠に視線を注いだまま「これは？」と胡蝶に尋ねた。

「黒真珠―十数年前に、紛失したある名家の家宝だ」
「紛失って家宝が？」
「そう。まあ、それは表向き、なのだけどね。実際はその名家の娘が親の取り決めた結婚に反発して、家を飛び出した際に持ち出したものなんだ。
私は一ヶ月前にそれを探し出して欲しいという依頼を受けた」
「は？」
祇音は胡蝶の言葉に、ようやく真珠から目を上げた。
ついでに木箱の蓋をしめたのは、再び視線があの見事な色彩にいってしまうことがないようにするためである。
「十数年前に無くなった家宝を今更、探し出して欲しいって？」
「そう」
「そんな、なんで今更」
「知らない。興味がなかったから聞かなかった。」
胡蝶はアッケラカンとした様子でそう言って、肩をすくめる。

（この人は……！）

祇音は思わず拳を握った。
以前から胡蝶には何かとこういったところがあった。
自分の興味が引かれるモノに対する好奇心というか探求心は呆れかえるほど旺盛であるが、それ以外のことについてはひどく無頓着なのだ。
だが今更、興味があるなしで片づけていい問題と悪い問題があることを彼女に諭したところで、馬の耳に念仏、言うだけ無駄だとい

うことはわかっていたので、結局祇音は何も言わずに黙って肩を落とした。
胡蝶はそんな祇音の様子を気に留めた様子もなく、胡蝶はぼやくように続けた。
「そもそもその依頼を引き受けたのだって、単にクソ暇だったからだし」
何かを探し出す依頼のみを受ける探し屋は、その特殊性故に依頼数が限られているのだという。
だが、胡蝶は優秀であるし、そんな珍妙な職をかかげているのは胡蝶ぐらいなのだから、それなりに需要と供給は一致しているはずだ。
にもかかわらず、胡蝶が暇を持てあましているのは、彼女が依頼をえり好みするからである。

（つまり、自業自得ってやつよね。）

胡蝶はちらり、祇音の内心を知ってか知らずかそのまま言葉を続けた。

「まあ、それでね—見つけ出したのまではいいんだけど、ちょっと新しくて興味深い依頼が手に入ってね。
これを依頼主に届けに行く暇がなくなってしまってねぇ……それで代わりに君に届けて欲しいと思って」
ダメかな？と胡蝶が首を傾げた。
祇音は一瞬、目を伏せた。

正直なところ　断る理由は何一つとしてなかった。
何処に届けるにしたって、祇音自身が目的地もなく放浪する身の上であるから、全く問題はないし、それだけのことで困っている胡蝶の手助けになれるのならば、願ってもないことだ。
ただなんとなく—あくまでもなんとなくであるが、一人旅で培わ

れた来た祇音の勘がこの申し出に対して警告を発していた。
しかし、どちらにしても、この機を逃せば、祇音が胡蝶の手助けをできる可能性はほぼ皆無となってしまうだろう。
祇音は「いいよ」とコクリと頷いた。
「どこに届ければいいの？」
「ふふ、ありがとう。助かるよ。届ける場所は――いや、その前に、君に同行者を紹介しよう」
「は？同行者？」
予想だにしなかった言葉に目を剥く祇音。
胡蝶はにこっと笑うと、そのまま室内の左隅の方に視線をやった。
そこには戸から差し込む細い光も入らず、より一層濃い闇がうごめいていた。
闇の一部が、胡蝶の視線をうけて微かに動いたように見えた。
それでも尚、全く気配が感じられない。
人がいる気配も、そうでない『何か』がいる気配も全く。
祇音は一体何が出てくるのかと、息をつめた。

（……虚無僧（こむそう）？）

ゆっくりと闇の中から姿を現したのは、驚くほど大柄な僧だった。
6尺はゆうにはあるだろう。
黒い小袖に白い男帯。替笛（かえぶえ）を入れた袋の括緒（くくりお）の房が腰から垂れている。
顔をすっぽり覆う深編み笠。ただでさえ暗い室内で、あんなものを被って前が見えているのか疑問だ。
肩幅も広く、白い手甲（てこう）に覆われた引き締まった腕が覗く。
祇音は驚きの余り無遠慮に、まじまじとその男を凝視した。
編み笠の前に小さく開いている隙間から、虚無僧がちらりとこちらを見た。

「彼は飛端（ひたん）　皇（こう）。君の同行者で――君の用心棒をして貰おうと思っている男だ」
「用心棒？」

確かに外見からいって、腕っ節の立ちそうな男ではある。
それにその動きに一切の隙がなく、立てる音……衣擦れの音一つにしても怖ろしく小さい。
恐らく相当の訓練を積んだ手練れであることは、武術については素人に軽く毛が生えた程度の祇音にも理解できた。
だが、同時にどうしても理解できないことが一つ
「なんでそんなものが私に必要になるってのよ？私、別に誰かに命を狙われるようなことしてないわよ」
「あれ、言ってなかっけ？」
胡蝶が首を傾げた。

「その黒真珠、曰く付きなんだ。」

第二話：その男、異質

「いわく付き！？」
予想だにしなかった胡蝶の言葉に祇音は目を剥いた。
そんな話は全く聞いていない。
驚く祇音に胡蝶は「ちょっと大げさだけどねぇ」とのんきに笑った。

「もしかして、持ち主が次々と死んでいくとかそういう物騒な代物なんじゃあ――」
「やだなぁ、そんなんじゃないよ。私がそんなものを君にもたせるものか。」
ふふ、と笑って胡蝶がひらひらと手を振る。
信用ならない、というようにジト目でみる祇音に、胡蝶は困った頬を掻いた。
「そんな顔しないで欲しいなぁ。大丈夫だよ、心配しないで。」
胡蝶は言った。

「実はねこの黒真珠、どうも持ち出したお嬢さんがお金を工面するために質屋かなにかに入れたのが、流れ巡って随分と物騒な集団の手元に渡ってしまってねぇ。
仕方がないからその集団の居場所をつきとめて、忍び込んで頂いてきたんだけどねぇ…？彼等、大分怒りでね。十中八九、取り戻さんと襲ってくると思うんだ。
つまり――ソレを持っているとおっかない人達に襲われる可能性がある、っていうだけさ」

忍び込んで頂いてきたとは、まるっきり盗賊じゃあないか――あっさりと言われた言葉に祇音はかるい頭痛を感じた。

何が「大丈夫」だ、何が「心配しないで」だ。十二分に危険極まりないじゃないか。「だけさ」ですまされる話ではない。
祇音がそういうと胡蝶は軽く肩をすくめて、虚無僧を示した。
「だから、彼を用心棒につけるんだって。大丈夫、この男もの凄く強いんだよ。その辺のごろつきが束になっても、全く問題にならないくらいに」
虚無僧は胡蝶の言葉に何も言わずただ黙って、こちらのほうを向いている。
――とはいえ、顔は笠にすっぽり覆われて見えないので、肝心の視線が何処に向けられているのかまでは分からない。
虚無僧になれるのは原則武士のみだ。虚無僧は身を隠すのに都合のいい姿ではあるから、中には潜りもいるわけだが―どちらにしても、虚無僧の中には怖ろしく腕のたつ者も珍しくない。
祇音はジロリと男を見上げた。恐らくこの男もその類の虚無僧だろう。
醸し出す伶俐な刃物のような雰囲気から、確かに彼がただ者でないことは容易にうかがい知れる。
しかし、胡蝶の言うおっかない人というのは、恐らく山賊とか盗賊とかいう類の連中のことだ。
つまりある程度腕に覚えがあって、しかも場数も踏んでいるような連中――その辺のごろつきとはわけが違う。
そんな連中が例えば何十人も束になってかかってきても本当に問題ないと言えるのだろうか。
護身術は少しばかり学んでいるけれど、実戦においてはまるっきり使い物にならない足手まといを連れて、それでも大丈夫なほとの強さがこの男にはあるのか　――。

祇音はついさっき対面したばかりのこの僧のことをいまひとつ信用出来ずにいた。

「大丈夫だって。この男、私の古い友人でね、コレの強さは私が保障する」

「古い友人？」

祇音は僅かに眉を顰める。

「だったら、わざわざ私じゃなくてこの人に持っていって貰えばいいじゃない。」

胡蝶の言葉に祇音は首を傾げながら、当然ともいえる疑問を問う。

胡蝶が苦笑をこぼした。

「それがねぇ、できないんだよ」

「どうして」

「……見れば分かる」

突然、第三者の微かにくぐもったけれど、低く重量感のある声が室内に響いた。

一瞬の間をおいて、祇音はそれが目の前の虚無僧から発せられた言葉だということに気が付く。

虚無僧の無骨な手が、彼が被っている深編み笠にかかった……と思うと、僧はためらいもなくスッと笠を外した。

彼の顔が戸から差し込む細い光に照らされる。

「…っ…」

祇音は思わず息を飲んだ。

短く裾が刈り込まれた赤銅色の髪、右目には黒い眼帯。左目は細く鋭利な光を放つ萌葱色の瞳。

鼻梁は高く、それにつづく唇は薄い。がっしりとした首に乗る顔。

顎の線は鋭く、明らかに祇音達とは違う彫りの深い顔立ち――

「南蛮人……？」
祇音の唇がそう微かに動いた。
男は小さく頷いた。

「わかったか。小娘。これが俺では無理な理由だ」
確かにろくに地理もわからない南蛮人に、見知らぬ異国の地で届け物をしろというのは無理がある話だ。
祇音はなるほど、と納得した一方で男の聞き捨てならない言葉に眉をはね上げた。

「誰が小娘っていうのよ！」
男に詰め寄って怒鳴ると、彼は祇音を感情の読み取りにくい視線で見下げたまま、抑揚のない声で言った。
「――山猿でもいいが」
「なっ」
何だって見知らぬ男に猿扱いをされなければならない。
怒り心頭の祇音をまあまぁと胡蝶が宥めた。

「ちょっとね、口が悪いだけなんだ。」
「ちょっとぉ？」
「ああ――ん、まぁ、大分、かな。根は悪いやつではないんだよ？」
取りなすように祇音に向かって胡蝶が微笑む。
が、そんな笑顔で懐柔されるわけもなく、相変わらず憤然とした顔つきをしている祇音に胡蝶は黙って肩をすくめた。

「まあ何はともあれ、二人で道中仲良くやって、これを届けてくれ。いいね？祇音」
「無理」
キッパリと即答。

こんな失礼な男と旅をする？冗談じゃない。
怒りを隠しきれていない祇音に胡蝶はやれやれ、と首を横に振って男を指さした。
「この男はあれだ……そう、ちょっとごっつい式の一人とでも思っておけばいいよ。」
「……オイ」

何か言いたそうに男が口を開いたが、胡蝶は気に留めた様子もなく男に背を向けた状態で続けた。

「実際、君以外にこんなことを頼める人間はいないのだよ、祇音。だから無理なんて言わずになんとか引きつけて貰えないかな？」

困ったように笑って、僅かに首を傾げながらそういう胡蝶に祇音は言葉を詰まらせた。
祇音がこういう表情に弱いと言うことを胡蝶は熟知しているのだ。見つめる胡蝶の瞳が寂しげに揺れた―無論、演技であることは祇音とてわかっていたのだが、どうしても動揺してしまう。
ダメ押しのように「祇音」と名前を呼ばれて、祇音は観念したようにわかったわよ、と声を上げた。
虚無僧が呆れたような視線をこちらに寄越すのが見えたが、構わず、祇音は半ば自棄になったように続けた。

「やるよ、やるればいいんでしょう！？一度引き受けるって言ったんだもん。女に二言はない！」
「ふふ、じゃあ決まりだね」
先ほどと、うってかわって晴れやかな表情をした胡蝶は男の方に顔を向け、小さく頷いてみた。
男はやれやれ、と首を横に振り、滑るような足取りで祇音の隣に並ぶ。

「な、なにっ？」
妙な重圧感を感じ、て祇音は思わず一歩後ずさった。
男はそんな祇音を横目でちらりと見て、言った。
「たった今から俺はその真珠とお前のガーディアンになった――近くにいた方が護りやすい」
「が、がーでぃあん？」
聞き慣れない言葉に祇音は眉を顰める。男はその様子に小さく舌打ちをして、「用心棒」と言い直した。
どうやら今、男が言ったのは異国の言葉だったようだ。
（感じわるっ。私が南蛮の言葉を知ってるはずがないじゃない）
祇音の眉間の皺はより一層深まり、このいけ好かない男に対する苛立ちは一向に納まる気配がない。
思いっきり睨み付ければ、男は小馬鹿にするように小さく鼻で嗤った。
喧嘩を売られているのだろうか、と祇音は思わず拳を握る。
コラコラ、と胡蝶が半ば呆れたように声をあげた。
「胡蝶」
男は祇音の様子を全く気に留める様子もなく、胡蝶の方に視線をやった。
なんだい、と胡蝶は軽く肩をすくめて応対する。
「俺たちは何処に行けばいい」
祇音はその言葉に、拳を握ったまま小さく「あ」と声をあげた。
（そう言えば聞いてなかった……）
この男の印象が強すぎて、すっかり行き先のことなど頭から抜けていたのだ。

男がそんな祇音を物言いたげに一瞥してきたが、敢えて祇音は気がつかない振りをした。
言いたいことは大方予想は付くし、これ以上苛つくと血管が切れてしまいそうだ。
胡蝶は「そう言えば言ってなかったねぇ」と暢気に笑って、懐から一枚の書状を取り出し、「はい」と祇音に手渡した。
「これは？」
「私が書いた委任状だよ。それと一緒に持っていって」
胡蝶は祇音の手元の箱を指差していった。
わかった、と祇音はコクリと頷く。
横で男は先を促すように胡蝶を見た。
彼女は祇音と男、交互に視線を送り、ニコッと微笑んで―…
爆弾発言をかました。
「君達は、これを若狭の土御門（つちみかどけ）家に届け貰う」

第三話：巡る思惑

土御門家（つちみかどけ）――

現在は応仁の乱の混乱を受け、若狭に移り住んでしまっているが、彼等は元々京に住む陰陽師安倍晴明の流れを汲む一族である。

歴代の当主は陰陽頭に就任し、陰陽師としての公的な仕事はすべてこの土御門家と、もう一つ賀茂氏の流れを汲む勘解由小路家（かでのこうじけ）によってとり行われている。

職業柄ときには忌み嫌われる陰陽師は、基本的にその地位が低い。

にもかかわらず、土御門家は長年築き上げてきた功績によって、堂上家（どうじょうけ）――殿上間に昇殿出来る資格が世襲された公家の家――としての資格を得たのである。

（そんな一族の家宝って……）

一体どんな代物だ、と祇音は溜息を吐いた。

今、懐にしまわれているものの価値を思うと、とんでもなく気が重いのだ。

そもそも大切なはずの家宝を十年間も放置するとは一体どういう了見なのか。

放置しても構わないほど、どうでもいい代物だったのだろうか？

いや、それならば家宝にはしまい。

わけがわからない、と再び大きな溜息を吐いて、祇音は天を煽いだ。

日は既に大分高いところに昇っている。

しかし、このままの調子で歩けばすっかり日が暮れてしまう前には、乙名の家にたどり着けるだろう。

秋晴れの空を見上げながら、祇音は足早に歩を進めた。

胡蝶は、仕事がつまっているかといって、寺の前で別れてしまった。
三年ぶりの再会であったにも関わらず、旧交を温める間もなく、アッサリと深い木々の間に姿を消してしまった胡蝶。
彼女らしいといえば彼女らしい行動ではある。

『まあ、余り慌てず、ゆっくりと旅を楽しむように届けてくれればいいから』

別れ際、胡蝶はそう言って暢気に笑っていたが、正直こんなものは直ちに持ち主に押しつけたい。手放したい。

（それに――）
ちらり、と祇音は隣を歩く男を横目で見る。
用心棒になったという南蛮の男は、深編み笠を被ったまま、一切の音を立てず、まるで滑るように歩いている。
よほどの訓練を積んだのだろう。胡蝶の「もの凄く強い」という言葉はなるほど、確かなようである。
祇音の視線に気が付いた男が僅かに首をひねって、「何だ、小娘」と此方を見下ろしてくる。
誰が小娘だ。祇音は小さく拳を握った。

（このクソがつくほど無愛想で胸くそ悪い男とは一刻も早くおさらばしたいのよ……！）
祇音は殴りかかりたいのをかろうじて押し殺し、努めて冷静な声色で「いい？」と、男を見上げた。

「これから行く家で私は、拝み屋の仕事を受けるの。」
「――拝み屋とは……」
「なんだ、とか聞かないでよ。説明するの面倒だし、私の仕事を見

てればわかるから」

男の言葉を遮って祇音はピシャリと言った。

彼は一瞬口をつぐだ後に、「……それで」と抑揚の少ない声で先を促した。

そこで祇音は乙名の家に泊まることになったまでの経由を簡単に説明して、さらに言葉を続けた。

「だから、昨晩まで居なかったアンタみたいなゴッツイ虚無僧をいきなり引き連れて帰って来たら、それは誰だとか聞かれて五月蠅いわけ。

まさか馬鹿正直に事情を説明するわけにもいかないでしょ？　だから、アンタは私の『式』ってことにするから、それで話し合わせて。」

祇音の言葉に男が一体どういう笠の下でどういう反応をしているかは全く分からないが、沈黙は了承と取ることにして、祇音は言葉を繋ぐ。

「それと、私の仕事は特殊なの。この世とあの世の境、逢魔が時に生きる…人じゃないモノ達を相手にしてる。

アンタがいくら肉弾戦で強いって言ったって、全く通用しない相手も中にはいる。だから何があっても手出し無用よ」

「……おい、言っておくが俺は、」

「祇音さん！」

何かを言おうとした男の低い声を打ち消すように、前方からどこかで聞いたことがあるような声がした。

そちらの方に祇音が顔を向ければ、乙名の息子である伊作が大きくこちらに手を振りながら、駆け寄ってくるのが見える。

「よかった。お帰りが遅いので、もう戻っていらっしゃらないかと」
軽く息を弾ませながら、伊作はほっとしたようにそう言った。
どうやら祇音が戻ってこないのを心配して、祇音が向かった方向にずっと歩いてきたようだ。
村から一里ほど離れた場所—まさかこんなところで逢うとは思わなかったと、祇音は小さく苦笑をこぼした。
「約束は守るようにしてるんです。依頼はお受けしますよ。」
祇音がそういうと、伊作はあからさまにほっとしたように息を吐いた。
相当信用されていなかったようだが、祇音は気にせずに更に言葉を重ねた。

「確か、お母上のご病気治癒への祈祷でしたよね？」
「ええ」
「昨日は詳しく伺いませんでしたけど、一体どんなご病状なんです？」
その問いかけに、伊作が言いにくそうに口淀む。
それからちらり、と祇音の隣にいる男を見やった。
慌てて言葉を加える。

「これは、私の式—舵手つまり、使い魔みたいなものですから、どうぞお気になさらず」
「ああ、なるほど……そうですか……」

祇音の言葉に伊作は一応は納得したようにおざなりに頷いた。
それでも彼はなお、落ち着かない様子で人目を気にするようにちらちらと辺りに視線を走らせた。
最終的には「兎も角拙宅に……」と囁くように彼は祇音達に言った。

言うもはばかれるような、人に聞かれてはまずい病と言うことだろう。
医師にかかるのではなく、祇音のような類の者に祈祷を頼む時点で普通の病ではないことは、容易に検討がついていた。
笠越しに視線を向けてくる男に祇音は小さく肩をすくめてみせる。

（珍しいことでもない、もんねぇ）
少しばかりうんざりしたように心の中で溜息を吐きながら、祇音は「わかりました」と頷いた。

＊＊＊

赤々と照る夕日が窓から差し込んで、室内を紅に染め上げた。
中には一人の男が胡座をかいて座り込んでいる。
恰幅のいい体つきにも関わらず、赤く照らされる顔つきは頬が痩け、広い額には二寸ほどの傷跡が生々しく斜めに走っていた。
古い傷なのだろう――僅かに盛り上がったそれを男は厳しい顔つきでそっと右手で撫でた。
ひそめられた太い眉の下で鋭い眼光が光り、傷跡の男は目の前の銅鏡をじっと見据えた。
鏡の縁部の断面形状は三角形で、鏡背には神獣を中心に複雑な文様が鋳出されている。
真ん中には丸い取っ手のようなものがついているが、上の部分が少し欠け、全体的に錆びて薄汚れた感じがする。
ただ、その表面は驚くほど美しく磨かれていて直径一尺ほどの大型のそれは、畳の上に置かれ西日を反射して怪しく煌めていた。
傷跡の男は鏡に向かって、静かな声で言った。

「――準備は整ったのか」
「滞りなく……全部順調デスヨ」

鏡の中に男らしき輪郭が朧気に映った。
冷厳とした室内とは不自然なほど対照的な明朗とした声が響く。
「抜かるなよ」
「わかってますッテ。『大切なお宝』、ですもんネェ。お頭」
『お頭』――そう呼ばれた傷跡の男は、尚更その眉間の皺を深くした。
どうやら、言い回しが癇に障ったようだ。
その変化を感じ取れたらしい鏡の男は小さく笑って、肩をすくめた。

「やだナァ、怒らないでくださいヨ」
「――…毎度のことながら、貴様の軽口には辟易するな。」
「軽口は叩けるうちに叩いておきませんとネ」

鏡の男の言葉に傷跡の男はふん、と鼻を鳴らす。
斜陽が山の端にかかり、夜の帳が徐々におろされていく。
様々なものが行き交う黄昏は過ぎ行き、世界は完全なる漆黒に姿を変えようとしていくようだった。
鏡に映る男の姿が大きく揺らいだ。
「時間か」と傷跡の男が息を吐く。
遠い地点と地点を『鏡』という媒介を使って結ぶこの術は、すべての境界が曖昧になる限られた間しか使用することが出来ない。
鏡の男は今にも消えてしまいそうで、傷跡の男は低い声で念を押すように言った。

「我々は必ず『あれ』を取り戻さねばならない」
「よ～く理解してますヨ」

その言葉を最後に鏡の中から男の姿は消え、辺りは完全な夜へと移行する。
ほっそりと差し込む月影が、男の青白い面差しを闇から浮き上がらせた。
赤というよりも紫に近い唇が小さく動く。
「――必ず。どんな手を使っても」

第四話：人面瘡のこと

乙名の家に到着するやいなや、祇音達は直ぐに奥の間に通された。

（小さな家だと思ったけど、意外に奥行きあったんだ）

昨日は囲炉裏の間に隣接する六畳ほどの部屋に通されたから気がつかなかったが、祇音の部屋とは反対側の八畳ほどの部屋を更に通り抜けた場所―まるで隠すようにある五畳ほどの小さな部屋があった。

流石に乙名の家だけはある、と祇音は妙に感心しながら、室内を軽く見渡した。

角柱、違棚と洒落てはいるが、棚には埃こそ積もっていないものの花瓶のひとつも置かれず、障子はピシャリと閉じられ、外の景色を伺うことも出来ない。

随分と侘びしい雰囲気のする部屋だ。

祇音は部屋の中央に無造作に置かれている一組の布団に視線をやった。

ふくらんだ布団が僅かに動く。

誰かが寝ているのか――祇音は無言で伊作を見上げると、彼は「母の松です」と僅かに上擦った声で言った。

緊張しているのだろう。

いつの間にか深編み笠をとった男が、隣で祇音だけに聞こえるよう低い声で囁いた。

「――おい」

「何よ」

「気を抜くなよ、小娘。妙な気配が、する……」

「だから小娘じゃないっつってんでしょ！」

小さな声でそう反論しながら、祇音は男の言葉を少しばかり意外に思った。
（何、この男、感じることはできるんだ）
別に有り得ない話ではないが、端からこの男にはそういう力がないと決めつけていた祇音はちょっとばかり驚いた。
ちらりと男を盗み見る。
この男の名は――なんと言ったか。
胡蝶が一度だけ言った名前を思い出そうと、祇音はん～と眉根を寄せた。
（確か「ひ」なんとか、いや「は」だったかなぁ）
「…祇音さん？」
曖昧な記憶を無理矢理ひねり出そうとしていた祇音は、伊作の心配そうな声にはっと我に返った。
こんなことを考えている場合ではなかった。
不安そうな顔をしている伊作に祇音は何でもないですよ、と大げさに手を前で振り、作り笑いを浮かべた。
それから取り繕うように「失礼しますね」と声をかけて、少し慌ててたように彼の母、松の枕元に寄る。
意識はないようだが、彼女は悩ましそうに顔をしかめ、痛みに堪えているかのように小さく唸るような声を上げている。
入り口からも僅かに感じた奇妙な気配が、彼女の傍に寄るとより一層強くなった。
布団を挟んで向かい合うように座った伊作が、固い声で言う。
「腕――右腕、が」
腕、と祇音は小さく繰り返した。
そっと布団に手をかけた祇音を、男が片手で制す。

何だと男を見上げたら、彼は何も言わずにそのまま無造作に布団をまくりあげる。
それから着物の袖がグイッとあげられて――白い腕が露わになった。

祇音は小さく息を飲んだ。

言ってしまえば腫れ物のようなもの。
ただ普通よりも大分、不気味ではあるが。
祇音は丁度、二の腕の辺りに視線をやった。
あるはずのない金色の光を放つ双眼がギロリと祇音を睨む。
その直ぐ下に、閉じられた小さな口のような割れめが見えた。

「…人面瘡」
祇音は二つの眼を凝視したまま、言葉を紡ぐ。
伊作と男の視線がこちらに向けられたのを感じた。

「人間の業とか怨念とか――そういうものが稀に人の顔みたいな腫れ物の形になって吹き出すことがある。これを『人面瘡』と呼ぶ。」
「それは治る、んですか？」
身を乗り出して問うてくる伊作。
祇音は小さく頷いた。

「一応、治ります。ようは身に掬う業を外に出してしまえばいいんですからね。膿みたいに」
膿ですか、と伊作が微妙な顔つきで言った。
大体の雰囲気は掴めたのだろうが、この不気味な腫れモノと結びつかないのかも知れない。

祇音はさらに言葉をつないだ。

「一時的な処置ですが、いまその治療をします。それで――」
すまなそうに眉を下げてみせながら、祇音は言う。
「申し訳ないんですか、ちょっと部屋の外に出て貰えますか？」
「外に？」
「人がいるとその……気が散ってしまいますから」
祇音の言葉にああ、と合点がいったというように伊作が頷いた。
「ああいうのは凄く集中する必要があるっていいますからね。」
「ええ、まぁ」
伊作の言葉に祇音は曖昧に微笑んでみせた。
分かりました、と伊作がコクリと首を縦に振る。
障子がしまり、伊作の姿が完全に消えたのを見届け、祇音はふぅと溜息をつく。

「……」
「な、なによ」

隣から男がじっとこちらを見ているのに気がつき、祇音は思わず身を引いて、けんか腰で言った。
男はソレとは対照的な淡々とした声で答える。
「人がいるからと言って、集中できんような、そんな繊細な玉には見えんと思っただけだ」
「うるさいわね、ああでも言わないと出ていってくんないでしょ？」
祇音は松の腕に右手をかざしながら言った。
「イヤなのよ。あまり『力』を使っている姿を普通の人に見られるの」
腕にある『目』の上を撫でるかのようにそっと手を動かす。
まるで右手に吸い込まれていくかのように、『目』が消え去る。

悩ましげな松の寝顔がふぅと穏やかなモノにかわった。
男がほんの僅かに目を見開いたのを視界の端で捕らえて、祇音は布団を直しながら言った。

「生まれつきの力。こういう怨念とか妖怪とか幽霊とか――負の力を吸収し、体内で浄化することができるわけ。」

祇音の名声は大半がこの力によるものだ。
家内安全を祈れば、家に住む雑念やらがすべて吸収・浄化され、商売繁盛を祈れば、商いの邪魔になる負の力を消してしまえることができた。
また、この力故なのか、それゆえのこの力なのか、人よりも霊的な存在を憑かせやすい祇音は口寄せや占術においても抜きん出た能力を発揮していた。
拝み屋として祇音は優秀だったのだ。
たが、依頼人の前でこの力を使うと、大抵彼等の目はある種の恐怖心に染まる。
畏怖、とも言えるかも知れない。
人知を越えたモノに対する畏れ。
それは術者として誇るべきコトなのだろう――けれど祇音にはどうしてもイヤでたまらなかった。
祇音は眉を寄せる。

そのとき、衣擦れの音と共に松が僅かに身動ぎし、ゆっくりと目を覚ました。
大丈夫ですか？と彼女の顔をのぞき込むように見て、声をかける。
（気がつかなかったけど、改めてみるとこの人、これまた随分と……）

若い。
年の頃合いは三十をいくばくか超えた辺りだろうか。
乙名は六十を超えていたように見えていたから――それを考えるとかなり、若い。
後妻だろうか、と祇音は思いを巡らせる。

「……あなた、がたは？」
暫くの間、さだらまらぬ視線を彷徨わせ、ようやくぼぅっとした口調で松がゆっくりと口を開いた。
鈴を転がしたような可愛らしい声だ。
祇音は安心させるように小さく微笑んだ。
「祇音、と申します。奥方様」
「し、おん」
松の視線が男の方に移った。
何も答えようとしない男に代わって、祇音が取り繕うように言葉を紡ぐ。
「あ、そこにいる男は私の式、式神なんです。空気かなんかだと思ってください。」
「空気、ですか――？」
「ええ、空気です。」
松が困ったように笑った。
淡い微笑み。
瓜実顔の上品な顔立ち、憂いを帯びた美しさが、女性の色香を感じさせた。
祇音は意味もなく気恥ずかしくなって、視線を泳がせる。
「い、伊作さんを呼んできますね」
腰を浮かせて、祇音はその場を離れようとする。
そんな祇音をその場に留めようとするように、袖が小さく引っ張られた。
視線を下げると白く、細い松の右腕が、祇音の着物の端を弱々し

く握っていた。

「あなたは……」

松が、か細い声で言う。

「私を断罪しにいらっしゃったのですか――？」

第五話：原因

時刻は夕七ツ頃。秋口とはいえ辺りは日が沈むにはまだ少し早い。
再び眠りについた松の穏やかな顔を、障子越しに差し込んだ夕日が照らした。

「本当に、本当にありがとうございます！！」
その横で、乙名に手を握られて、床に頭をこすりつけんとばかりに礼を言われること四半刻ばかり。
喜んで貰えることは祇音としては嬉しいことではあったが、こうも重ね重ね礼を述べられると、いい加減に居心地が悪くなってくる。
祇音は助けを求めるように少し離れたところで、壁にもたれて座っている男を見やった。
笠を取った彼の髪は日の光を浴びて、淡く輝く。
整った顔立ちが愁いを帯びたような影を作りだしながら、眠るように目を伏せていた男。
祇音の視線に気がついたのか、彼が細い目を開けて此方を見た。
宝玉のような瞳が、祇音を射抜く――

が、それから数秒後、まるで何事もなかったかのように男は再び、視線を下げて目を閉じた。

（見なかったふり！？）

というよりも自分には関係がないと言わんばかりの態度か。
浮かべていた愛想笑いがピクリと引きつる。
どちらにしても、随分と無責任な対応。
祇音の仕事において発生した問題なのだから、彼に助ける義理などないと言われてしまえば確かにその通りではあるが、仮にも用心

棒を名乗るつもりならば手の一つぐらい差し出してくれてもいいように思う。
憤然とした祇音に気がついた様子もなく、乙名はなおも礼を言い続ける。
祇音は終いにはしびれをきらして、「あの！」と声を上げて乙名の言葉を遮った。

「よ、喜んで頂いているのは嬉しいんですが、今の松さんの容態は――謂わば小康状態なんです。
だから……原因を取り除かなければ、再発します」
床に両手をつき、頭を軽くあげた状態で、　はぁ、と乙名はなんとも間の抜けた相づちをうつ。
浮かれて、事の重大性が理解できていないのか――祇音は乙名には聞こえないように小さく舌打ちした。
だが外面上はにこやかな笑みを浮かべたまま、祇音は更に続ける。
「人面瘡は成長するに従って、喋り、食物を要求するようになってきます。その要求に応えなければ、耐えられぬような痛みに襲われ、請われるがまま食物を与えていると、段々身体は衰弱し、骨と皮ばかりにやせこけ――」
祇音はそこで言葉を切った。
ちらりと松の顔を一瞥し、キョトンとしている乙名に再び視線を合わせ、低い押し殺した声で続ける。
「死にます」
「し、死ぬ！？」
乙名は驚いたように裏返った声で叫んだ。
少し離れたところで事の成り行きを伺っていた伊作も、驚いたように腰を浮かせていたのが視界の端に映った。
「そんな、死ぬなんてっ！い、一体どうすればっ！松は、松はっ！！」
松の布団越しにグッと迫ってくる顔に、祇音は思わず身を引いた。

地味に怖い。
「じ、人面瘡という病は、業や怨念が原因としてあげられます。」
それ故に人面瘡を治すことはは下手な鬼退治やら妖怪退治やらよりも難しい。
原因は患者の中にあり、患者が自らの罪を認め、告白しなければ人面瘡が消えることはないのだ。
祇音は大分引きつった笑みを浮かべながら、必死な乙名を諭すように、努めて冷静な声でゆっくりと言葉を紡いだ。
「それで……聞きにくいことではあるんですが、原因について……何か心当たりとかありませんか？」
一瞬の間が空く。
その反応に、なにかあるのかと、期待半分に乙名の様子を伺えば、予想に反して、彼は大きく目を見開いて大げさなまでに、そんな！と大きく首を横に振った。
あまりの勢いにピクリと祇音は肩をふるわせる。
「あれは決して人の恨みを買うような人間じゃない！」
予想以上の、もしくは予想外の反応。
唾を飛ばさんばかりの勢いに祇音は、再び身をグッと後ろに引く。
乙名は構わず言葉を繋ぐ。
「確かに生まれも素性も何も分からない女で、中には口さがない連中が悪く言うこともありますけどね、あれは至って気だての良い、人の良い女です！」
乙名のあまりの剣幕におされ、祇音は口の端を無理矢理あげたような笑みを浮かべて、「そ、そうですか」と曖昧に頷いた。
憤慨したようになおも、喋り続ける乙名の言葉を右から左に聞き流して、祇音は困ったように頬を掻いた。

（そういうことじゃ、ないんだけどなぁ――）

聞きたかったのは『向けられる悪意』ではなくて、『向ける悪意』――即ち、松の持つ業・恨みである。

祇音は小さく溜息をつく。

到底そんなことを聞けるような雰囲気でもなし、聞いたら聞いたでこの状況では、火に油を注ぐようなモノで、とても有益な答えが返って来るとも思えない。

祇音は、乙名の声量にもピクリともせず眠り続ける松の顔をじっと見つめた。

綺麗な寝顔。

儚げながらも優しげな、おっとりとした雰囲気の松。まるで、業とか怨恨などという言葉とは無縁そうに見える。

というよりも不似合い、なのか。

「逆恨み」なんていう言葉があるくらいだし、松が恨まれると言う行為は、まだ祇音には納得がいく話なのだが……

その逆は――どうも、しっくりこない。

彼女が何かを恨むというのも、何かしらの罪を犯しているというのも。

けれど、人面瘡が彼女の腕に現れたと言うことは何よりも明確に彼女の中に巣くう、『負』を示しているのだ。

（って、いくら考えても出るような答えじゃないわよね、コレ）

たった数語、松とは言葉をかわしただけだ。

祇音はやれやれ、と疲れたように首を横に振った。

頃合いを見計らって、用意された部屋に引っ込むことにする。

適当な言葉で取り繕って、その場を退室しようと立ち上がる祇音に続いて、壁際に居た男がスッと腰を上げた。

乙名は松の布団の横で未だに座り込んでいて、伊作は少し離れた

ところでその様子を見守っていた。
退室する祇音に伊作が小さく頭を下げたのに、祇音も軽く会釈をしてから奥の間の障子を閉める。
祇音は男がついてくるのを横目で確認して、土間を通って昨日と同じ、祇音達にあてがわれた六畳間へと入った。

男が襖を閉めて、そこから少しばかり横にずれた壁に、より掛かるようにして立つ。
赤い西日が障子を燃えるように染めていた。
段々と辺りが暗くなっていく様子を、祇音は少し開けた障子の隙間から眺める。
秋風が祇音の頬をそっと撫でた。
「――どうするつもりだ」
おもむろに男が口を開き、尋ねた。
「は？なにがよ」
質問の意図がつかめず、祇音は眉をひそめて男の方を振り返った。
男は細く鋭い、睨み付けるような目つきで祇音を見据えたまま、低い声で言った。
「あの女のことだ」
「女って……ああ、松さんのこと？」
あの女扱いに顔をしかめながら、どうするもなにも、と祇音は言葉を繋いだ。
「何度も言っているけれど取り敢えず原因を見つけないとねぇ。」
口元に手を当てて、考え込むように視線を宙に泳がせる。
そう原因よ、と祇音は自分の言葉を繰り返した。
一番難儀で、一番納得ができない部分。
無理矢理、終了させた思考が再び巡り始める。

どうしたって、気にかかるのは彼女が発したあの言葉。

（断罪、だなんてねぇ）
断罪される何かが彼女にはあるのだろう。あんなことを言うということは。
しかも恐らく、人には言えないような、言っていないような――何かが。
不似合いだけれども、ほぼ確実に、何かがある。
そしてそれが、あの人面瘡の原因となり得ていることはほぼ明らかだ。
あの後すぐに乙名達が来てしまったがために、その言葉の意味を本人に問うことは結局できず終い。
けれど、あのような言葉を口にしたのだから、告白を促せば容易に彼女は自らの罪を話してくれるやもしれない。
そうすれば、万事解決、である。

原因を聞き出して、対処して……なんとか一週間以内に此処を立つことができればいいと、祇音は漠然と考えた。
そんな祇音に男が半分呆れたような口調で言った。
「つまり、お前はこのまま此処を立ち去る気はない、ということか」
「立ち去る？なんでよ」
何を言っているのか、と祇音は訝しげに男を見る。
彼は首を僅かに左右に振ると、祇音の問いに答えることなく、そのまま床に座り込み、眠るように目を伏せた。
自分で話を振っておいて、途中で会話の続行を放棄するとは、なんともまあ自分勝手なことだ。
だが、そんなことを言い始めたところで、この男にとって何処吹く風であることは、半日の付き合いのうちにすでに理解した。
癇に障るが、ある程度、妥協しなければそれこそ血管がなどすぐ切れる。
祇音は天を煽いで、重々しい溜息をついた。

遠くの方で鴉が鳴く。
徐徐におろされる夜の帳が、一日の終わりを告げようとしている。
怒濤などという言葉ではあらわしきれない一日だった。
どこからともなく夕餉の香りが祇音の鼻をくすぐった。
散々だった一日の締めくくりにはあまりにも平穏すぎる匂い。
けれど何ともなしに、ほっとして祇音は小さく微笑んだ。

＊＊＊

宵闇が迫る此方（こなた）で、それは薄く微笑み、囁いた。

「さあ、我慢することなんてない」

甘い誘惑。刹那への誘い。
抑圧された欲望の開放を囁くモノ。

もはや、償える罪などありはしなかった。

第六話：鍛錬と猫

猫の鳴き声がする。
遠くの方からは、雀がちゅんちゅんというさえずる声が聞こえてきた。
しばしの微睡みの後、祇音はゆっくりと瞼を細く開けたが、肌を切るような朝方の空気に一瞬、暖かい布団から出てしまうことをためらう。
それでもなんとか、「えい」と小さく掛け声をかけて、祇音は布団をはねのけると、ん～と思いっきり伸びをした。
ひんやりとした外気に意識が一気に浮上していく。
そうしてみると、昨日の疲れがすっかり抜けて、驚くほど身体が軽いことに気がついた。
やはり、布団で寝るとよく休まる。

「よし！」
気合いをいれるように軽く両頬を叩くと、祇音は手早く小袖を着替え、背中の辺りで切り揃えている黒髪を慣れた手つきで頭の高い位置でくくった。
少し妙な髪型ではあるけれど、これが一番動きやすい。
枕元においておいた木箱を大事に懐にしまい、準備万端――といったところで、祇音はふと男の姿が見えないことに気がついた。

（どこに行ったわけ、あの馬鹿）

男の寝る場所について、昨晩ちょっとした悶着があった。
だが、男に他に寝る場所がないこと、寝込みを襲われたらどうするという男の主張のもと、同じ部屋で睡眠をとることを認めたわけであるが――。

「意味無いじゃない、いなかったら」
祇音はむぅっと顔をしかめる。
朝っぱらからあの嫌みな顔を見ないですんだと思えば、喜ばしいことなのだけれど。
勝手にいなくなられるのも、気にくわない。
何となくすっきりしない心持ちのまま、祇音は囲炉裏の間へと続く障子を開けた。

雑炊の香りが漂ってくる。

鍋をかき回していたのは、伊作だった。
彼は下を向いていた顔をあげて、ニコッと微笑む。
「おはようございます。」
「おはようございます――えっと……松さんは、まだ？」
伊作が微苦笑を浮かべて、首を横に振る。
そうですか、と祇音は残念そうに呟いて囲炉裏のすぐ傍に腰を下ろした。
すかさず器に盛られた雑炊が差し出される。
すぅっとその香りをかいで、祇音は感心したように唸った。
「良い匂い――昨日も思ったんですけど、伊作さん、お料理上手ですね」
「はは、ありがとうございます。」
伊作が快活に笑った。
「年季が入ってる、からですかね」
「年季ですか？」
思わぬ言葉に祇音は首を傾げる。
伊作は自分の分を器に盛りながら、答えた。

「お気づきのことだと思いますが、今の母は――松は後妻でして。
四年ほど前に父が娶ったんです。

私の実母である前妻の勝は、私がまだ数え7つの時に亡くなりましてね。それから松さんがくるまでこの家の料理とか家事は全部僕が引きつけていたので」

小さい頃は大変でしたけどね、と軽く伊作が笑った。

それから懐かしむように目を細めて、彼は更に続ける。

「松さんは、少し実母に似ているんです。まあ、年は大分違うんですが。何て言えばいいのかな、えっと……」

「雰囲気？」

「そう、それです。」

伊作がポンッと手を叩く。

祇音はその様を見ながら、また一口、雑炊を口に運んだ。

雑炊の味噌の香りが口いっぱいに広がり、暖かい食事が腹の底から、身体を温めていくのを感じ、暫く黙って食事に集中する。

外の方から子供達の声が聞こえてくる。朝っぱらから元気なことだ。

子供は風の子というけれど、彼等にはこれしきの寒さ、関係ないのかも知れない。

そんなことを思い始めると、なんだか自分が老けた気分になると祇音は一人苦笑を零した。

お腹が空いていたからなのか、それとも雑炊の味が良いからなのか、みるみるうちに器はすっかり空になる。

それを置いて、ふぅと息を吐く祇音に伊作が尋ねた。

「今日はこれからどうなさるご予定で？」

「松さんが目覚めるまで少し村を散策させて頂こうと思っているんですけど――」

（というよりも、聞き込みね。）
松という人間について、より多くの意見を聞きたかった。
彼女がどんな人間なのか。
本当に彼女が何かしらの罪を犯しうる人間であるのか、否か。
無論、目覚めた松に聞いてしまうのが一番手っ取り早いのだが、彼女が目覚めるまでの間、ただぼぅっとしている手はない。

当然そんな本心をいうわけにもいかず、曖昧に微笑む祇音に、伊作は「そうですか」とコクリと頷いた。

「では、僕は田で米の収穫をしてますから、何かあったら言ってください」
「ありがとうございます」
「あ、あと――お連れの方、えっと……」

名前を言おうとしたのだろうか伊作が、途中で口ごもった。
そう言えばあの男は名前を名乗っていなかったな、と思い出し、少々呆れた。
とはいえ、祇音自身も男の名前を未だに思い出せずにいて、それでもなんら不便はしていない。
一応祇音の式ということにもなっているし、伊作があの男の名前を知らずとも、さしたる障りはないかもしれない。
祇音はそう思いながら、「あれがどうしました」と首を傾げて、伊作に先を促した。

「先ほど、朝餉を召し上がったら、外に出ていかれましたが……」
「外」
「はい。どうされたのかとお聞きしたら、『鍛錬』とだけお答えになって。一応、お伝えしておきます」
「あ、はい。どうも」

戸の向こうへ消えた伊作の後ろ姿を見送りながら、祇音はどうしたものかと眉を顰めた。
男がいないうちに、外を歩き回るのは不用心かもしれない。
こんな村の中、真っ昼間から襲うような輩はいないだろうが――もしも、ということがある。
胡蝶から信頼されて任された手前、祇音としては万全を期したい。

（戻ってくるまで大人しく部屋で待ってるしかないわね）

全く、と呟きながら祇音はやれやれと首を振る。
そもそも、用心棒だなんだと言っておいて、あっさり祇音をおいて鍛錬にでるとは何事だ。
帰ってきたら文句の一つでも言ってやろう、と心に決めて、祇音は部屋に戻り、自分の荷物をごそごそと漁った。

取り出したのは黒塗りの七寸ほどの懐剣。柄頭と小尻に金色の装飾を施した――養父の形見である。
旅に出てから、一度たりとも抜いたことのないそれを祇音は慎重な手つきで撫でた。
滑らかな鞘の感触。
柄の部分に手を滑らせて、握ってみせる。
ズシリとした重さが右手にかかった。

養父は優しい男だった。
殺生を嫌い、誰よりも命の尊さと儚さを知り、この世の無常を知りつつも、移り変わり消えゆくものを見ては、悲しげな笑みを零していた。
その養父から受け継いだ懐剣を、この三年間、祇音はどうしても使う気にはなれずにいた。
養父亡き今、これを養父そのもののように感じているせいなのか

もしれない。
祇音は、この刃を紅に染めることは元より、誰かに向けることもすらしたくはなかった。
「でも、やっぱり、すぐ出せるようにしておいた方が……いい、かな」
仮にも物騒な連中に狙われている身なのだ。
一応あの男が用心棒としてついているとはいえ、咄嗟に自分のことを守れるようにしておくことに越したことはない、だろう。
暫く思い悩むように祇音は目を伏せた。
静かな室内に外の喧騒とした音が流れ込んでくる。
人の声、鳥の鳴き声、風が吹き、木々が擦れる音。
どこか遠くで聞こえるそれらの音に混じって、直ぐ近くからニャーとかギャーとか言う猫の鳴き声が聞こえてきた。

（猫同士で喧嘩でもしてんのかしら？）
祇音は訝しげに眉を寄せた。
ちょっと庭の様子を見てみようかと、祇音は懐剣を脇に置いて、腰を上げる。
障子に手をかけ、開け放った――次の瞬間、祇音は視界に飛び込んできた予想もしていなかった光景に、思わず固まった。

「……何してんの、アンタ」

そこに居たのは、半裸の状態で俯せになり、腕立て伏せを行っている男だった。
この気候にも関わらず、よく鍛えられた上半身にはびっしり汗をかいている。
まあそのさまは、暑苦しいが別段見苦しくはない。

問題は、なぜかその背中や足下に、まとわりついている数匹の猫である。
どうやら先ほどの鳴き声は、この猫達が男の上で互いに牽制しあっている声だったようだ――が、どういう状況なのかわからない。
無愛想な面をして、実は猫好き……なのか。
男の背中の上で、爪を立てている猫達になんとも言えず押し黙る。
無造作に男が身体を起こした。
しなやかな動作で地面に降りた猫が、彼の足元で可愛らしい鳴き声をあげる。
頭に乗る一匹の猫を無骨な手で掴み、下ろしながら、男が不機嫌そうに言った。

「勝手に寄ってきた」

（……何にそれ）

木天蓼（またたび）の匂いでもまき散らしているのか。
男の言葉に呆れかえったが祇音だが、男の仏頂面と周囲の可愛らしい風景が、余りにも不似合い過ぎて、思わずプッと吹き出した。

「おい、何を笑っている」
鬱陶しそうに猫を払いながら、男がむっとした表情で言った、
「別に～？ただ、歩く木天蓼（またたび）男なんだな、って思っただけよ。」
祇音はそう言って、ふふんと笑った。

「っていうか、それよりアンタどこ行ってたわけ？あんだけ用心棒、用心棒だとか言っておいて何、勝手に鍛錬行ってんのよ」
男は黙って、先ほどまで彼が猫と戯れていた――ではなくて腕立てふせをおこなっていた辺りを示した。
はぁ？と眉を跳ね上げる。

「んなわけないじゃない。障子一枚隔てたところに居たらわかるっつーの」
「わからなかったんだろう。小娘には」
はだけた上着に袖を通した男は、顔に滴る汗を拭い手ぬぐいで拭い、室内に上がりながらそう言った。
いつの間にか猫の姿はどこかに消えてしまっている。
「誰が小娘だってのよ！？」
「喚くな、小娘」
五月蠅そうに男が眉を寄せた。
「また言ったー！！」
叫ぶ祇音を男はちらりとも見ず軽く手を振っただけであしらい、部屋の隅に置いてあった彼の少ない荷物から、手甲を取り出してはめ始めた。
その様子にむっとしていた祇音だったが、ふと男の手甲の形状に怪訝そうな視線を向けた。
甲の部分から腕にかけて、何か固い物が入っているようなのだ。
視線に気がついた男が、祇音を一瞥して言った。
「――鉄板を入れている。手で、刀を受けられるように」
祇音は小さく目を見開いた。
「鉄って……ひょっとしてそれ、かなり重いんじゃないの？」
「別に」
祇音の驚きをよそに男はぶっきらぼうにそう言うと、今度は替笛（かえぶえ）を入れている袋を帯の間にねじ込んだ。
手甲から考えるに十中八九、あれも入っているのは笛ではないだろう。
ちょっと気になるが、聞いてしまうと何だか色々負けのような気がするので祇音は黙って、男の所作を眺めていた。
最後に深編み笠を被った男は、障子に手をかけて、ぼうっとしている祇音を呆れたように見やった。
「……行くんじゃないのか」

「へ？」
「外」
男の言葉に、祇音は本来の予定を、はっと思い出した。
（そうだ、聞き込み！）
こんなところでぼうっとしている場合ではない。
「い、行く！」
祇音は慌てて頷いて、出しっぱなしだった懐剣を元のように荷物の奥へとしまい込み、それからさっさと先に行ってしまった男の背を小走りで追いかけた。

第七話：男と話

朝方の澄み渡った高い空が好きだ。蒼空の中に煌めく日神が告げる朝で始まる一日は、それだけで限りなく貴重なものに思えてくる。

特に秋は、それに涼やかな空気が相まって尚更に清々しい。

祇音は、石段の上に腰掛けて深く息を吸って、ゆっくりと空気を吐き出した。

和んでいる場合じゃないのは重々承知しているが、することがない今現在まで緊張と保ち続けろというのは無理な話である。

背後でこれ見よがしに聞こえた溜息は聞こえなかったふりだ。

（私だって、好きでこうしてるわけじゃないんだから）

勢いこんで外に繰り出したはいいものの、黄金色の稲穂の間に居る人々は、誰も彼もが忙しそうに一心に刈り入れをしていて、とてもじゃないがよそ者が割って入って話をきけるような雰囲気ではなかったのだ。

それ故に、村人に話を聞くことを諦めて、取り敢えず見つけた古びた社でしばしの休憩をとることにしたのであるが――不機嫌そうに腕を組んで、こちらを見下ろしている男の存在のせいでちっとも休んでいる心地がしない。

ついにしびれをきらした祇音は、「言いたいことがあるならはっきり言ったらどう！？」と、怒声を張り上げたが、男は五月蠅げに眉を顰めた後は、ただ黙って首を横に振って見せただけだった。

その仕草の意味するところがなんだかは知らないが、どうにしても腹立たしく感じられ祇音はふんっ、と鼻を鳴らす。

ちなみに似たようなのやり取りが、かれこれ五回は繰り返されている。

いい加減飽き飽きしたように祇音は溜息をついた。
「ねぇ、アンタの言いたいことはわかってる」
祇音は、一旦言葉を切って斜め上の男の方を真っ直ぐみるように視線をやった。
「さっさとこの黒真珠、届けろって言うんでしょ？　」
男はその言葉に、ほんの微かに片眉を上げて、ようやく口を僅かに開いた。
「……わかって」
「――るならさっさと行くぞ、とか言わないでよ。そんなことできるわけないでしょ」
そんな男を一刀両断するように祇音は憤然とした様子で言った。
「一宿一飯の恩義なのよ。返さないわけにはいかないのよ。ほっぽり投げて、はいさようならなんてできない」
いや、必ずしもそれが全てではない。
ここにとどまる理由の一端には、祇音自身の感情、即ち一方的な責任感や使命感のせいでもある。
あるいはそんなかっこいいものではなくて、もっともっと利己的で、偽善的な祇音の都合によるものともいえるのかもしれない。
だが、それらをすべて男に説明する気にはならず、建前のような理由のみを告げると、男は「くだらん」と一言吐き捨てて、何が気に入らないのか底抜けて青い空に睨み付けるようにして、更に言葉を続けた。
「情に流されて、本質を見失えば、身を危なくするのは小娘、貴様自身だ」
男の口ぶりは重々しく、思いの外、此方に向けた視線は厳しい。
男の言葉を後押しするように、今まで緩やかに吹いていた風がピタリと止まったのも加えて、まるで内心を見透かされたような気が

して祇音は一瞬たじろいだように、口をつぐんだ。
「……何が言いたいのよ」
ようやっと押し出すように口にした言葉は、自身が想像していたものよりもずっと小さかった。
祇音はそんな自分を戒めるように拳を握りしめる。　男はそんな祇音の様子に構うこともなく低い声で言葉を繋いだ。
「その懐にあるものをさっさと手放さない限りは死と隣り合わせと言っても言い過ぎではないということだ」
男はさらに続ける。
「あまり軽く考えるな、真珠も――あの女も」

＊＊＊＊

「あの女？」
祇音は思いも寄らない男の言葉に、僅かに目を見開いた。
この男の言うあの女とは十中八九、松さんのことに違いない。
祇音は「松さんでしょう」と一言、男のあの女呼ばわりを諌めてから、訝しげな視線を真っ正面から男に向けた。
「軽く考えるなってどういうことよ」
「――あの女の業は、小娘、貴様が思っているよりも深い」
「何それ……アンタ、ひょっとして、松さんの業が何か知ってるの！？」
祇音は思わず男の方にぐいっと身を乗り出して尋ねた。
そうしてから、馬鹿なことを聞いたと祇音ははっと口を抑えた。
よく考えればそんなことは有り得ないのだが、男の物言いが余りにも真剣そのものであったせいで、つい一抹の期待を覚えて、訊いてしまったのだ。
案の定、男は小馬鹿にするような視線を祇音に向けると、小さく「アホか」と呟いて、言った。

「俺が知っているわけがないだろう。頭が弱いのか、お前は」
「なんですって！？」
「いちいち怒鳴るな。鬱陶しい」
男が煩わしそうにそういうのに、神経を逆撫でされ、更に男を怒鳴りつけたい衝動に駆られる。
（―とはいえ、これ以上この男に何を言っても、無駄に体力を消耗するよね）
祇音は僅か一日、二日で把握した男の質に、仕方なく口を閉じ、男もこれ以上は何も言うつもりがないのか、黙って目を瞑った。

祇音は懐の木箱に手を伸ばし、そっと表面を撫でた。
そうやってなめらかな木肌に触れると、妙に落ち着かない気分になる。
初めて見たときには感じ取られなかった何かを、今のような落ち着いた状態でやっと感じ取ることができるようになったのかもしれない。
――あるいは、先ほどの男の言葉に少なからず動揺してしまっているのか。
視音は男を横目で見やった。
鬱陶しいか、それとも秋も深まった頃とはいえ暑苦しいのか、周りに誰も居ないのも手伝ってか深編み笠を外しているせいで、男の顔は陽光の元にさらされている。
紛れもない南蛮人。いや実際に祇音が南蛮人を見たことがないことを考慮に入れた言い方をするならば、少なくともこの国の人間ではないという言い方が正確か。
視音は鼻梁の高い男の横顔を視界の端に収めながら、妙なことになったモノだと改めて思った。
普通ならば、決して交わることのなかったモノ、出逢うはずがなかったもの。
この男も、真珠も。

真珠が危険だというのならば、この男も祇音にとっては同じくらい危険で、掴みようがない存在だ。
たとえ、この男が祇音を守るために居る人間で、胡蝶の友人だったとしても、見知らぬ男に対する不信感は拭いきれない。
（そういえば……）
この男と胡蝶一体どこで知り合ったのだろう。
胡蝶という人間故に、あっさりと受け入れてしまったけれど、よく考えたら不思議な話だ。
そんな疑問を男にぶつけてみると、男が一瞬奇妙な顔つきをした。
「――そんなこと、知ってどうする」
「別に、ただの好奇心だけど」
男はなんともいえない表情を浮かべた後、そのまま沈黙を守った。
とはいえ、端から解答など期待していなかったので、祇音は特にそれ以上言葉を重ねることはせず、同様に口をつぐんだ。
「――胡蝶と知り合ったのは、俺がまだ餓鬼の頃の話だ。」
男の低い声が耳に届いたとき、祇音は僅かに目を見開いた。
だが、だからといって、無闇に驚きの声をあげて、男の話に水を差すような愚行は犯さず、黙って男に視線を向けた。
「捨てた俺の命を拾った女――それが……あの女だ。」

第七話：男と話（後書き）

２０１０／７／１８
久々の更新！お待たせしましたっ。
男の話。

小さな村

「どういう――意味よ」
「額面通りの」
男はそう短く答えた。
「だからっそれって……」
「捨てるくらいならくれというから、やった。ただそれだけのこと」
それだけのこと、なのか――祇音はそれ以上言葉を重ねることができず、黙って男から視線をそらす。
淡々と語る男の口ぶりからは、そこに至るまでの壮絶な、殺伐とした何かが感じられて、どことなく気まずい気分になってしまった。
そんな祇音を男はちらりと一瞥する。
「……聞かないのか」
「なにをよ」
「理由」
男の言葉が簡潔だったが、意味することは当然察せられて、祇音は「聞かない」と首を横に振った。
「どうせ聞いたって黙秘するんでしょう？それに　」
人が命を捨てる理由なんて知りたくないもの――祇音は小さく呟いて、そっと目を伏せた。
お互いにこれ以上深く、聞く気も語る気もなかったからか、男はそうかと頷いたあとは、また祇音の後ろに立ったまま黙って、空を見据え始めた。
祇音もそれにならうように、ぼぅっと宙に視線を彷徨わせようと頬杖をついたときだった。
少し曲がった背中。
杖をつきながら、左足をひきずるように歩くおぼつかない足取り

と共に、階下に現れた人物に祇音は、「あ」と声を漏らした。
「おお、祇音様」
乙名も気がついたようで、階下から此方を見上げて、会釈をする。
よろよろと階段を登ってくる乙名に慌ててかけよって、その背に手をそえながら、彼の足取りに併せて石段を登りきる。
いつのまにか深編み笠を被っていた男は、腕をくんだまま、黙ってそれを見すえていた。
なにをさせてもいちいち偉そうで、癪に触る男だ。
祇音は完全に男を視界から閉め出すように、完全に男に背を向けた。
「どうかなさったんですか？」
祇音がそう尋ねると、乙名は右手にもつものを目の前に掲げて見せた。
重く頭を垂れ下げた、黄金色の一束の稲穂。
乙名はにっこりと笑った。
「私の田でとれた稲穂です。　松が目覚めましたお礼に、神前に捧げようと」
「松さん、目を覚まされたんですか！？」
「ええ、先ほど。いまは伊作がついております。」
乙名はそう言って、嬉しそうにさらに笑みを深めると、両手で稲穂を掲げながら、社のほうに歩を向けた。
丁重にそれを捧げている様子を眺めているところに、男が「おい」と声をかける。
言いたいことはわかってる。
祇音は男の方にちらりと視線を送って、コクリと頷いた。

＊＊＊

暫くした後、乙名はまたゆっくりとこちらにやってきて、祇音の隣に並び、石段から村の景色をゆっくりと眺めた。

黄金色に染まった辺り一面に、風がサァァァァと吹き抜けると、穂が穏やかにその頭を揺らす。
美しく、豊かな景色だ。
祇音は、ほぅっと溜息を漏らす。

「小さな村です、ここは。」
隣で、同じようにこの光景をみていた乙名が、唐突にそう言った。
「それに山々に囲まれているせいで人の出入りも多くなく、この村は至極閉鎖的。
だから――余所からきたものは、良くも悪くも目立ってしまう。」
「度合いの差こそあれ、そんなこと、この村に限ったことではありません。」
どことなく切なそうな乙名の横顔に思わず、祇音はそんな言葉を投げかけた。
彼の言葉の真意が掴みきれないまま、発した言葉であるから、果たして慰めになっているのかも定かではないが、
乙名は少しだけ微笑んで、言った。
「そうなのかもしれません。
いえ、多くの村々を行き来なさっている祇音さまのおっしゃっていることです、そうなのでしょう。
ですが、私は――私の生きている村が、そうであることが時折悲しく思うときがある。」
「悲しく、ですか？」
祇音は、乙名の言葉に訝しげに首を傾げた。
乙名はそんな祇音をちらりとみて、再び風景に目をむけたまま、一端口を閉じた。

「松は、外からきた人間なんです」
彼は重々しそうに再び口を開いて、沈痛そうな口調でそういうと、ポツポツと松のことを話し始めた。

「松は村のはずれで行き倒れておりましたのを、伊作がみつけて連れてきたのです。
ひどく衰弱していて、怪我もしていました。　身体が癒えるまで、家に居させることにしました。」
松は、最初動くことすらままならない状態だったが、そのうち恩義を感じてなのか、女手のなかった乙名の家で、家事一切を引き受けてくれるようになった。
そんな状態でずるずると、松は傷が癒えてもとどまった。
松にどういう思惑があったのかは、そもそも思惑があったのかどうかすらわからなかったが、乙名はそれを黙認した。
いや、自身もとどまっていていてほしいと、そう思ったのだ。
愛情は、先妻のときのように激しいものではなかった。
ただ、穏やかにゆっくりゆっくりと育っていった。
伊作も、松には懐いているようでもあり、それが乙名の決心を後押しした。
松を妻に迎えることにしたのだ。

しかしそれを乙名が言い出したとき、村中が反対した。

「元々、皆は松に対して不信感をもっていたのです。　素性を語らない松を『どこの馬の骨ともわからぬ女』――そう言っておりました。」
「松さんは、なぜ素性を語らなかったのです？」
祇音の問いに乙名は、わかりません、と首を横に振った。
「聞いても悲しそうな顔をするだけでしたから。
けれど私はそれでも構いませんでした。　人間、忘れたい過去もございましょう。
松が忘れたいなら、忘れさせて、ここで新たな生活をすればいい。
そう思ったのです。」

乙名は続けた。
「私は騙されているのだと、そういう者もいましたが、私は松がそういう女だとはどうしても思えなかった。
だから私は周囲の反対を押し切って、松を妻に迎えました。　村人の態度も、時が解決するだろうと思ったのです。」
しかし、と彼は溜息をついた。
「村は、一向に松を受け入れようとはしませんでした。
狭い領域でしか生活をしてこなかった村人にとって、唐突に現れた松は、忌むべきものであり、恐怖であり――そう、魑魅魍魎なようなものだったのです。
そんな中での生活が、日々、どれほど松にとってつらかったのか。
ついにはあんな風に病にまで冒されてしまった」
乙名はそういって、悲しげに首を横に振った。
それから祇音のほうをみて、さらに言葉を重ねた。
「どうかわかっていただきたいのです。　松は何も悪くなどない！
悪いのは、ここに松をしばった私であり、外からのものを受け入れられないこの村の性質なのです。」

驚くほど感情的な口調に、祇音は思わず目を瞠ったみはっ　た。
そんな祇音の表情に、初めて乙名は自分の感情の高ぶりに気がついたらしい。
取り繕うような微笑みを浮かべた。
「少し、昔話が過ぎましたかな。　戻りましょう、松とお話をされたいのでしょう？」
乙名はそう言うと、祇音達の返答も聞かないうちに、さっさと来た道を再び戻り始めた。
何がなんだかわからないまま、それでも慌てて後を追おうとする祇音に、男がさっと並ぶ。
男が低い声で耳打ちした。
「だから言っただろう」

面倒なことになるぞ、という男の言葉に祇音は何も言い返すことができない。
ふて腐れたように、ふんっと顔を背けた。

嘘と決意

松は、上半身だけを布団から起こした格好で、祇音達を迎えた。
穏やかな日差しのなかでみた松の顔は、祇音の記憶よりも幾分か顔色が良い。
松は上品なおっとりとした胴さで、祇音達に深々と頭を下げた。
「ほんとうになんとお礼を申し上げて良いか・・・・・・。」
懇ろに礼を述べる松。　祇音は、その表情に目をとめた。
僅かに目を伏せている横顔は、憂いを潜めつつも、どこか抑えられた色気を感じる。
ちらほらと見かけたこの村の女達が持っているのは、日に焼けた肌、豪華な気質と力強さだ。
なるほど、この村の人間からすれば、確かに松は異質めいてみえるかもしれない。
しかし、祇音が気にかかったのは松から感じるもっと別な何かだった。
違和感といえばいいのだろうか。最初に出会った松とは何かが違う気がした。
ただ何が違うのか、何がそう感じさせるのか、それはまだわからない。
祇音は、そんな思案に頭を巡らせながら、顔だけはにこっと微笑んで言った。
「それが仕事ですから。　もうお加減はよろしいんですか？」
「ええ、元々、あの奇妙なできもの以外は、悪いところなんてありませんでしたから。」
それから松は少しだけ眉をひそめて言った。
「夫は、あれは他人の怨念が原因だと申しておりました。
本当に――そうなのでしょうか？私は知らぬ間にどなたかに激しく恨まれているのですか？」

松の言葉に祇音は一瞬、言葉をつまらせた。
どのように答えたたところで、彼女の横顔をくもらせてしまう。
どうしたものかと、答えに窮している祇音に、勘違いをしたらしい松は「そうなのですね」と顔をうつむかせた。
「祇音様」
再び面(おもて)をあげた松は祇音のほうに向き直って言った。
「これはうつる……ものなのでしょうか？」
「え？」
「病、なのでございましょう？これは。病は人に移るもの。まして、その原因がどなた様の怨念だというなれば、これは呪い。
一族みな、末代まで祟るなどという恐ろしい言葉もこの世にはあるよう。ならば、あるいは夫や息子にまで、この病はうつってしまうのでしょうか？」
確かに病は、うつる。
一族に、あるいは不特定多数に害をなす呪いもある。
しかし、人面瘡というのは病でもなければ、呪いでもない。その人の心の膿なのである。
だからうつらないし、他人には害がないのだ。
「いいえ、そんなことはありません」
祇音はきっぱりとそう否定すると、松は少しばかり安心したように息を吐いた。
「でも」
「でも？」
さらに言葉をつなぐ祇音を松は不安そうな面持ちで見つめた。
「病は治癒したわけではございません。一時的な処置であって、病は――人面瘡は必ず再びあらわれます。
根本的な解決をしなければ。」
「根本的な、ですか。」
松はしばらく考え込むように目を伏せた。
「申し訳ないことに覚えがありませんの。」

松は言った。
「おそらく、知らぬ間にどなた様かにひどい無礼を働いてしまたのでしょう。申し訳にないことです。
ですが、故意的にどなたかにそのようなことをした覚えはないのです。ですから、私を恨んでいる方がどなたなのか、それは検討もつかないのです。」
申し訳ありません、と松は再び顔を伏せた。
おそらく松の言うことは本当なのだろう。
もし、仮に彼女を恨んでいる人間がいても、それは人面瘡とは全く関係がない。あるはずがない。
松が言った。
「この病、もし治らなければどうなるのでしょう？」
「それは……」
祇音は再び言葉に窮した。
まさか本人を目の前に、死にます、などと言えるはずもない。
祇音は言葉を探すように宙に視線をさ迷わせていたが――

「死ぬ」

今までずっと押し黙っていた男がなんとも簡潔で、そしてひたすらに無神経な一言を言い放った。
一瞬唖然としたあと、心の底から沸々とした怒りがこみ上げてくる。
（なんだってこの男は、こうもいちいち余計なことばかり口走るの！）
祇音は隣の男を咎めるように小さく、険しい声を発した。
「ちょっと……！」
「なんだ」
男は祇音の険しい声色を、意にかいする様子もなく、いつも通りの抑揚のない返事をした。

それがなおさらに祇音を苛立たせる。
「もう少し言い方ってのがあるでしょ！？」
男がうっとうしそうに眉をひそめた――気がした。
実際は、笠のせいでその表情は読めないがおそらく間違いない。
「どういう言い方をしようが事実はかわらんだろう。この病が治らなければ、この女は死ぬ。
そして今のままでは確実にこの女は死ぬ……違うか？」
「だからって！」
「いいえ、いいのです。祇音様。」
松が静かにそう言って、静かに首を横に振り、そっと祇音の手に触れた。
「綺麗な手――祇音様はこの手で沢山の方を救っていらっしゃったんでしょうね。」
冷たい指先が祇音の手の甲をなで、そしてそのままぎゅっと手を握られた。
松が縋るような目で祇音を見た。
「祇音様、どうか私のことは忘れてくださいませんか。」
「え？」
「私なぞ捨て置いて、どうか他の方をお救い頂きたいのです。」
松の言わんとしていることを理解した祇音は慌てて、首を横に振った。
「な、何をおっしゃってるんです。そんなことできません！」
柔らく松が微笑む。
「祇音様、これ以上あなたの手を煩わせるような価値は私には――」
「それはあんたが言ってた『断罪』に関係があるのか」

＊＊＊

男の言葉に、松は、驚いたように目を見開き、そして顔を強張らせた。

また余計な口を挟んだ男をにらみつけてやろうと思ったが、祇音もずっとそれを尋ねたくて、その機をうかがっていたものだ。
しかも男が言葉を発した頃合いは、的確で適切。
（今回だけ、今回だけなんだから……）
男を許容した自分自身に言い訳するように心の中でつぶやきながら、　松の様子をうかがった。
「夢を――恐ろしい夢をみたのですわ」
「夢？」
思わぬ言葉を、祇音は思わず聞き返した。
松は小さく頷いて、恐ろしい夢の内容を思い出すように目を伏せると、おびえたような震えた声で話し始めた。
「私は、一人で、なんだかとても暗い所をにいたのです。自分の手を伸ばした先すら見えないような深い闇でした。その奥から何かが囁くのですわ。とても口にはできませんような恐ろしい――そう、とても恐ろしいことを。」
「恐ろしい、こと？」
「ええ、でも私、よく内容を覚えていなくて……でもただ、もの凄く怖くて。
だから私が祇音様方がおっしゃるような妙なことを口走っていたら、それはきっと私、夢と混乱して、寝ぼけてしまっていたからだと思いますの。」
松は恥じるように顔を少し伏せてみせる。
そんな松の顔をじっと見つめながら、祇音はその言葉の真意をはかりかねていた。
松の言っていることが、何の説明にもなっていないことは明らかだった。
自分を捨て置けという理由も、断罪を呟いたその理由も――松の言葉では、どうやっても説明しきれないのだ。
おそらく彼女の言葉は嘘、なのだろうということは、祇音にもわかる。

でもだからといって、なぜ彼女がそんな嘘をつかねばならないのか、それが理解しかねた。
このまま彼女を問い詰めたところで、おそらくは何も得られまい。
祇音はそう判断して、一旦この場を辞すことにした。

部屋を出て、襖をそっと閉めようとしたとき、松が祇音の名を呼び止めた。
「なんでしょう？」
半分閉めた襖に手をやったまま、祇音は部屋をのぞき込むように隙間から顔をのぞかせた。
松は、その手の中にある見覚えのある木箱を祇音に差し出すように見せた。
「これ、落とされましたわ。」
「え？――あ、ない！」
懐の奥にしまっておいたはずの、あの黒真珠が見あたらない。
祇音は慌てて松の方に駆け寄って、その手から木箱を受け取った。
蓋をそっとあければ、きちんと黒真珠がそこに鎮座している。
祇音はほっと息を吐いた。
何かの拍子の落としてしまったのだろうか？　これからはもっと気をつけなければなるまいと、再び慎重な手つきで懐にそれをしまった。
それから松の方を向き直り、礼を述べようと口を開くと、それを遮るように松は祇音の耳元に、口をやり、小さく呟くように言った。
「どうか、どうか私は捨て置いてくださいますよう……。」
松はそういうと、そっと祇音の顔を見て微笑んだ。
その微笑みは優しく、美しく――そして強靭な決意が見え隠れしているような気がして、祇音はなんの言葉を返すこともできないまま、短い礼を述べて、部屋をでることしかできなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2476g/

黒の至宝　－Black Regalia－

2011年12月11日15時53分発行